

“ひきこもり”とその支援をみつめて 社会のあり方を問う

10月11日、ひきこもりの当事者の方にもご参加いただき、研究会を開催しました。その内容を編集し、おとどけます。



泉 翔さん (NPO 法人ウィークタイ 代表理事)
 鈴見咲君高さん (当事者)
 藤原 望さん (生活困窮者自立支援事業 主任相談員)
 石田 泰二 (社会福祉法人つむぎ福祉会東大阪事業所 所長)
 司会：加美嘉史さん (佛教大学 教授)

スタートは生きる 意欲 をもちたい

泉 翔さん (NPO 法人ウィークタイ 代表理事)



不登校から大学進学の大逆転……？

私は現在三三歳です。中学生の三年間を不登校で過ごし、通信制の高校に進みました。学校にも行けない自分はこれからどうなるのだろうと不安でいっぱいでしたが、関西大学にストレートで合格しました。毎日せっせと学校に通って勉強している人に、不登校の自分が勝てたんだと思いました。大逆転というか、「良い大学

に行つて良い企業に就職する」というこれまで自分が否定してきた価値観に、逆に乗れるんだと思ひ、自信満々でした。

しかし、そもそも社会で言われる「ふつう」の道を否定してきたのだから、急に社会の流れに乗れるわけもなく、すぐに破綻します。その破綻が、すごく大きかったです。たとえば、三回生で就活がはじまると、周りの人たちがいつきに髪を黒くして、真っ黒のスーツに着替えるんです。私は、

その急激な変化についていけませんでした。

私を救ったのは仲間との出会い

就職はせず大学院に進学し、二年間大学に在籍しましたが、この間にひきこもり状態を断続的に三〜四年ほど経験しています。ひきこもりを繰り返しながら徐々にメンタルを悪化させていき、各種の依存症や、最終的には自殺未遂を繰り返していました。

そのときに私を救ってくれたの

は、支援者ではなくて、同じ苦しみを抱える仲間との出会いでした。これが私の大きな転機です。

その当事者団体が、現在のNPO法人ウィークタイです。二〇〇三年ごろから任意団体として当事者グループをはじめ、二〇一四年に法人化をしました。そのとき、私はうつ状態だったのですが、参加歴が長いことからなんとなく自然な流れで代表になってしまい、それが現在まで続いています。

対等な当事者同士のあつまり

団体の代表というと、管理や統率するイメージがありますが、私たちは当事者グループで私自身もいまも精神科に通院している当事者ですので、代表と言っても、活

動をするときに会場の鍵を開けるくらいです。もちろん、給料もありません。

いちおう拠点となる場所は豊中市にあり、そこは会員であれば鍵を開けていつでも使うことができます。月に七、八回くらい開催している居場所活動や自助会は、拠点に限らず各地の公民館などで開催しています。

生きる「意欲」が失われるということ

活動をするなかで感じることは、ひきこもりの問題は、生きる「意欲」が失われていく問題だということ。一般的な「ひきこもり支援」は、「手段」です。就業支援も生活保護も、それらは生

きていくための手段です。もちろん手段も必要ですが、そもそも生きる意欲がないのにいくら手段を提示されても、それはなかなか届きません。

その「意欲」の部分を支えるのは、私は仲間にしかなれないと考えています。同じような悩みを抱えた仲間から「どれだけしんどくても、やっぱり生きていこうよ」というパワーをもらえることが、大きな第一歩になったりするので

生きるパワーをもらえる仲間とのつながり

いろんな仲間の話を聞くたびに、自分自信も救われます。その日一日を、とりあえずがんばって

みようと思えるのです。その繰り返してなんとかこれまで生きてこられているのが実際に、仲間の存在はとても大きいです。

いくらアツアツでおいしそうなご飯を出されても、食べる気なければ、冷めてやがてくさっていきませよ。当事者グループで活動する際には、まずはご飯を食べよう！ と思える、生きる意欲に直撃する何かが必要だと、つねに考えています。

当事者グループは不可欠な資源

私の経験からみても、ひきこもりの支援にとって、当事者グループは欠かせない資源の一つです。問題は、それにもかかわらず、当事者グループがひきこもり支援の

資源として位置づけられていないということ。アルコール依存や薬物依存など、さまざまな依存症は、いまや

当事者グループにつながることは必須だとさえされています。しかし、ひきこもりやメンタルヘル스에課題を抱えた人は、どうしてもこの当事者グループが資源として捉えられないのです。私は、これが大きな問題だと思っています。

社会不適合者といつまなざし

自分の存在価値がわからず、生きる意欲がないときに、さらに侮蔑や排他の圧力が加えられると、自分に置き換えても、すぐよくわかります。たとえば、まわりからの「社

会不適合者」といつまなざしです。

これは、支援者と呼ばれる人も多いです。「世の中はこうなのに、そうできない人」というまなざしにもとづく支援には、侮蔑のメッセージがふくまれます。私は大学生のとき、そうした侮蔑のメッセージを暗に感じる支援に頼りたいとは思いませんでした。自分のプライドが許しませんでした。

そうした社会的なまなざしにさらされたときに、その矛先が自分に向いたのが、私の自殺未遂です。しかし、いまになって過去を振り返り、自分の「被害」をあるていどわかったときに、実は「加害」もやっていたことに気づきました。私にとっては、部屋のモノ

を破壊するという行為です。

ひきこもりの被害者加害者

昨今、ひきこもりが関わった事件がありました。川崎市で起きた無差別児童殺傷事件はひきこもりの人が加害者となり、東京都練馬区で起きた事件は、被害者でした。いま「ME TOO」という運動が注目されていますが、自身がME TOOという言葉を使うなら、まさにひきこもっていた加害者であり被害者である彼らです。

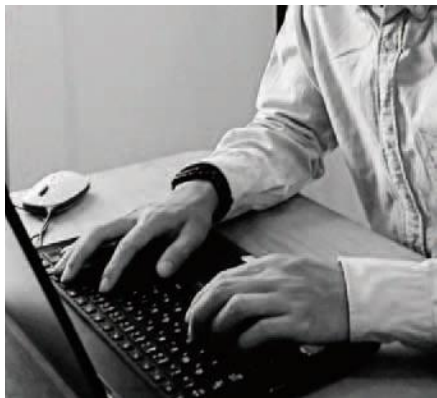
もちろん、あの事件は許されるものではありません。とくに加害者となった事件にはたくさん被害者がいて、その被害者の方々をないがしろにするわけでは、決して

てありません。でも、私は加害者にME TOOという気持ちをもちています。

ひきこもりが原因ではない

もちろん、ME TOOという気持ちをもっているからといって、それがひきこもりの人はみな事件を起こすかもしれないということではありません。私が部屋を破壊していたときも、たとえばカーテンは自分で買ったものだから破つてもいいけれどカーテンレールはダメ、本棚は壊していいけれどシャワーはだめ、というように、壊していいものとダメなもの、実は頭の隅で分別をつけながら暴れていました。

無差別に人を殺害するというの



は、その行為に及んでしまうほどの何らかの圧力を、加害者が受けていたということではないでしょうか。それはひきこもりに限りません。だれであつても、それほどまでの何かしらの圧力がかけられれば、そうした行為に及んでしまう可能性があるということだと思えます。問題は「ひきこもり」にあるのではなく、そこまでさせるにいたったさまざまな圧力にあるのではないのでしょうか。

誠実に向き合ってほしい

ひきこもり支援にかかわる方にお願ひしたいことは、当事者に誠実に向き合ってほしいということ。ひきこもりのロールモデルがなにかという、ワーキングプアなんです。部屋から出て、就労支援に乗っかって仕事に就いて、それで将来どれだけ稼げるかという、ほとんどの人はぜんぜん稼げません。マイカーやマイホームなんて、夢のまた夢です。

支援者その現実を隠して、仕事さえ見つければ将来は安泰だとか、先が見えるとか、自分は家族もいてマイホームをもちながら「私みたいなこともありながらもがんばっている」とか、そうした

う散臭さはやめてほしいと思えます。

就労以外の選択肢がある

ひきこもりなんですと行政の窓口相談に行くと、仕事の話しかされません。「きみはもう働いている場合じゃない。そんなぐちゃぐちゃな家族のところにいるでしょうがないから、すぐに世帯分離して生活保護を受けよう。生活保護ではゆたかな暮らしはできないけど、でも落ち着いて、一人で考えられる時間はできるから」という話をしてくれる人は、ほとんどいません。

生活保護を使う、精神疾患の診断書をとる、障害手帳をとるなど、就労以外の選択肢はたく

さんあります。とにかく当事者が安心して、落ち着いて生活できるためには何が必要なのか、誠実に向き合ってほしいですし、それをひきこもり支援を担うサポステ（若者サポートステーション）がするべきだと思っています。

お酒の飲み方がわからない

ところで、就職してすぐに退職する理由としてしばしば聞くのが、お酒の場で粗相をしたということです。多くの人は、学生のころに友人や先輩らとの関係性の中で、自分が飲める量やお酒の飲み方を学んでいると思います。

ひきこもっていた人は、だれにもお酒の飲み方を教えてもらっていません。そのまま急に就職して、

はじめて上司と飲みに行った場で粗相をして会社に行けなくなるといふケースは少なくありません。

そのため、私たちの当事者グループでは、お酒の飲み方やアルコール依存症を学ぶ講座をしています。このような講座は、本来ならばサポステなどの支援機関側が、当事者の就労のその後に起こり得る困難のひとつとして想定し、実施すべきではないでしょうか。多くの就労支援は、「就労」というあくまで人生の一点にすぎないことをゴールと設定し固執してしまい、その後のほうが長い当事者の人生に対する想像力が欠けているのではないかと思えます。

当事者と支援者といつ関係

もちろん、支援者の方たちがみんな仕事が安定しているわけではないことは、知っています。「支援者の側も非正規で来年どうなっているかわからない」という話を聞いて、はじめて支援者の人と向き合って話ができたといい仲間のエピソードもよく聞きます。

すごく特徴的なケースですが、正規職としてサポステで働き、ひきこもりの就労支援をしていた人が、ひきこもりになって当事者の側に来たというケースもあります。その方は、相談者を就労にあてはめていくことがしんどくなつたようです。

「救い」と「助け」はちがう

支援がいらないとか、批判をし

ているわけではないありません。生きようと思ったときに、その手段を考えたり、手段を得るための支援はかならず必要です。

ただ、「救い」と「支援」は異なるのだと思います。「助け」は支援によるものですが、「救い」は当事者同士のつながりによってうまれてくると思います。

依存症の人たちに自助グループが必須だとされているように、生きづらさやメンタルヘルスの課題を抱えている人たちにも、生きていく「意欲」を得るうえで当事者同士のつながりは必須だと思えます。そこを、もう少しひきこもり支援に必要なものとして認識し、しくみとして位置づけてほしいと考えています。